



👁️👁️ みどころ

去る9月15日の女優・樹木希林の死亡は日本映画界の大きな損失だが、ベテラン俳優・大杉漣が2月21日に死亡したのも同様の損失。パイプレーヤーの役割の重要さを彼ほど感じさせる俳優は少なかったが、本作は“大杉漣”、最初のプロデュース作にて最後の主演作”だ。

しかし、“教誨師”とは一体ナニ？ “支え役”よりはわかりやすいが、その実態は？それをしっかり本作で学ぶと共に、まるで舞台やドキュメンタリーのように教誨師が接する6人の死刑囚のキャラに注目！そして、最後に一人だけ死刑執行に至る死刑囚は一体ダレ・・・？



■□■ “支え役” の他にも、死刑囚と向き合うこんな仕事も！ ■□■

吉村昭原作『休暇』を映画化した『休暇』(08年) (『シネマ20』142頁) は、タイトルだけでは何の映画か全くわからないものだった。しかして、その“休暇”とは絞首刑による死刑執行の際、台下に落ちてくる死刑囚の“支え役”を志願した刑務官に与えられる一週間の休暇を意味していたから、その意味の深さにビックリ！その『休暇』で脚本を担当した佐向大が、本作では監督として6人の死刑囚と向き合う“教誨師”という職業に焦点をあてたが、それは一体なぜ？本作のプレスシートにある監督インタビューによれば、そのきっかけは本作が“最初のプロデュース作にして最後の主演作”になったベテラン俳優、大杉漣の父親が教誨師をしているという話を聞き、大杉がその教誨師役を演じれば、濃密な人間ドラマができるのではないかと思ったことらしい。なるほど、なるほど・・・。

もっとも、プレスシートでは、教誨師とは「刑務所や少年院等の矯正施設において、被

収容者の宗教上の希望に応じ、所属する宗教・宗派の教義に基づいた宗教教誨活動（宗教行事、礼拝、面接、講話等）を行う民間の篤志の宗教家である。」と書かれており、「平成29年末現在の矯正施設における教誨師の人数は約2000名であり、そのうち仏教系が約66パーセント、キリスト教系が約14パーセント、神道系が約11パーセント、諸教が約8パーセントとなっている。」だそうだが、佐伯（大杉漣）はなぜそんな“篤志”な仕事をするようになったの？世の中にはいろいろな職業があるが、教誨師を描いた映画は多分本作がはじめて。こりゃ「支え役」と共に、しっかり勉強しなければ・・・。

■□まるで舞台劇！6人の死刑囚のキャラに注目！■□

2018年2月に亡くなった大杉漣は1980年以来的出演作が400本を超える貴重なパイプレイヤーだが、本作で佐伯は1人で6人もの一癖も二癖もある死刑囚と1人ずつ対峙しなければならないから、大変。トップバッターとして登場するのは、一言も口をきかない鈴木（古舘寛治）だが、こんな男に対してもあれこれ何かと会話のきっかけをつかもうと努力している姿をみていると、“よく頑張っているな”というより、むしろ“滑稽感”“無力感”が湧いてくる。しかし、そこで諦めては教誨師は勤まらないため、佐伯は月2回のご奉仕ではローテーション通りに鈴木と面会し、何度も何度も話しかけていた。すると、ある日ついに鈴木は・・・？なるほど、これが教誨師の仕事か、と納得。

本作はドキュメンタリー映画ではなく、脚本も佐向監督が書いている。そして、本作は「全編にわたって劇伴も場所の移動もなく、限られた空間で登場人物が1対1で対話する」というスタイルで作られているので、大杉のセリフはべらぼうに多い。もちろん、そんなスタイルでは映画のエンタメ性は犠牲にならざるをえないが、それを上回るリアリティと迫真性があれば大正解で大満足。それが佐向監督の思惑だったが、大杉がその要請に応えるのは大変だ。

他方、6人の死刑囚のうち、前述した鈴木は無口が取り柄だから静の演技で魅せるが、大阪弁でしゃべりまくる野口（鳥丸せつこ）は膨大なセリフをしゃべらなければならないから、これは憶えるだけで大変。プレスシートの中で、大杉は「膨大なセリフ量故」、「役者にケンカを売っているのかと思った」そうだが、それは、きっと鳥丸せつこも同じだろう。私は、年離れたホームレスの進藤正一（五頭岳夫）、面会にも来ない我が子を思い続ける気弱な小川一（小川登）、大量殺人者の若者の高宮真司（玉置玲央）という3人を演じた俳優は全く知らないが、前述した古舘と鳥丸の他、気のない(?)ヤクザの親分を演じた光石は演技達者なビッグネームだから、よく知っている。本作では、佐伯と6人の死刑囚とのセリフのぶつけ合いだけで十分なドラマになっているから、それに注目！

■□教誨師だって人の子。時には腹の立つことも・・・？■□

佐伯が教誨師として接する6人の死刑囚のうち、最も扱いやすかったのは進藤。彼が宇

が読めないことがわかると、字を教えてやればいいし、自らキリスト教の洗礼を受けたいと言ってくれば、それも全く問題なしだ。他方、最も扱いにくかったのは、きっと高宮。高宮は毎回、議論を楽しむかのように佐伯の言葉に反駁し、社会への不満をぶちまけ、「死刑囚との対話で心の安らぎを求めるのは、俺ではなく、あんただろう。」と言い放ってくるが、それに対する佐伯の再反論は・・・？いつもきちんとネクタイを締め、手には讃美歌の入った旧式の録音機と聖書を持っている佐伯は、教誨師らしく常に死刑囚への対応は丁寧だが、それでも人の子。高宮の挑発(?)を受け続けると、思わず反発し、大きな声を出すこともあったが、さてその是非は・・・？野口との“対話”では、基本的に佐伯はしゃべる必要はなく、野口の一方的なおしゃべりの聞き役に徹すればいいが、高宮との“対話”ではそうはいかず、延々と続きかねない議論をどう收拾するかが毎回のポイントになる。もちろん、そこには“これが正解”というものがないから、その対話はよけい難しいわけだが、さて本作で佐伯はどこまで教誨師としての役割を全うできているの？

ちなみに、本作ラストではついに一人の死刑囚に対する死刑が執行されることになり、佐伯はそれに立会うことになるが、その死刑囚とは一体ダレ？

■□■死刑の是非論までは映画では無理・・・？■□■

佐向監督が自ら書いた脚本では、死刑執行の雰囲気を感じとった吉田がそれまでの余裕を持ち続けた態度とは打って変わって、佐伯に対して「何か情報を持っているだろう」と迫る姿が面白い。吉田ほどの腰の据わったヤクザの親分でも、いざ時の法務大臣が死刑執行の命令を下すのか否かという情報に居ても立ってもいられないらしい。もちろん、教誨師の(に過ぎない)佐伯がそんな情報を事前に知っているはずはないから、彼は吉田に対して「私は何も知りません」と答えたが、さあそれで吉田は安心するの・・・？佐向監督の脚本では、そんなハラハラドキドキする展開を踏まえて、ラストのクライマックスに入り込んでいくので、その両者に注目！

しかし、佐向監督が本作を企画しベテラン俳優・大杉漣にことごとく教誨師役を徹底させたのは、死刑囚がいかにか死刑という刑罰におびえながら日々それに向かいあっているかを緊張感を持ってスクリーン上に描きたかったためだ。しかし、私が思うに“死刑の是非論”になるとそのテーマはとてつもなく重くかつ深いため、とても1本の映画では表現できるものではない。したがって、本作も教誨師という職業を通じて6人の死刑囚の実態や死刑執行への恐怖までは描いたが、死刑の是非論までには立ち入っていない。私はそのことを少し残念に思うと共に、“それが映画の限界だろう”と妙に納得したが、さてあなたは・・・？

2018(平成30)年9月22日記